

# 日本とアラブ 思い出の記 (その1)

昭和五十五年九月

日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局

## 目次

イスラム研究ブームことはじめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
先次対戦未までの思い出    前嶋信次	
外務省アラビア語研修のはじめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23
大原與一郎先生にきく	
アラブ史研究の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
藤本勝次先生を囲んで	

# イスラム研究ブームことはじめ

先次大戦末までの思い出

前嶋信次

とき 昭和五十三年七月二十四日  
ところ アジア経済研究所 8 A 会議室

( 1 )

今日は私の思い出話をいたします。一番先に日本で中東のことを研究しはじめたのは、トルコ関係の人ではないかと思ひます。例えば内藤智秀先生とか大久保幸次先生です。そのころアラブ研究の方はかげにかくれていたような存在ではなかったと思ひますが、当時の政治情勢の反映ともいえるかも知れません。その次には、荒木茂先生のようにアメリカのコロンビア大学でペルシャ語を研究してこられた方があります。この先生には私も少し習ったことがあります。当時アラビア語を勉強して中東のことを調べようとする人はなかなかでなかった。この分野の先駆者としては、私の考えるところでは、松本<sup>しげはる</sup>重彦先生がごく古い方ではないかと思ひます。この先生は東大の国史科の出身でして、初期の大阪外国語学校（今の大学）の先生をしておられる時にはすでにアラビア語に興味をもっていたようで、国史の先生にしてはめずらしいことですが、のちに京城大学の教授になりました。いつごろのことかわかりませんが、先生がヨーロッパに留学したときに、ちょうどゴルトツィーハーが死にまして、その蔵書を日本で買おうという案があったそうでした。その買い取りにブダベストとかに出かけたという話を私は先生から戦後直接聞いたことがあります。終戦後は、この先生は東京に帰ってこられました。もう奥様も亡くなられて、一人で目黒の方に下宿しておられました。そのときに黒柳（恒男）君と一緒に私も一度訪ねたことがあります。戦後の非常に不自由なときで、洋間を改造した部屋を一室、素人下宿でしたが借りておられまして、いろいろな話を伺いました。もうすでに中央大学の方へつとめておられたようでしたが、アラビア語を勉強した話をいろいろされまして、その大阪外語で最初にアラビア語科というものをおきましたのも、こういう先生が最初におられたということとも関連があるかもしれません。大阪外語の初代の学長が中目覺という人で、ことばについても実に広い見識をもった方でしたから、それでアラビア語などにも目をつけていたれたのかと思ひます。松本先生は戦後中央大学にはいると田坂興道君を教授にひっぱりました。田坂君は中国のイスラム史の専門家でしたけれども、非常に篤学の人でした。小林元君などの話によりますと、田坂という男は出世したいためにイスラムをやっているんだと、そういうような皮肉な批評をしておりましたが、とにかく温厚な学問一筋の人でありまして、中田吉信氏などは田坂氏の影響を大分受けているのではないかと思ひます。この先生を中央大学にひっぱりましたのもおそらくその松本重彦先生ではないかと思ひますが、これは想像です。ところが田坂君はもとは東洋文化研究所におられたようですが、終戦の少し前あたりに、東北学院という仙台の学校にいきました。

そこに行く前に、私を訪ねてこられたことがあります。私はそのころ、満鉄東亜経済調査局（一時は虎の門の満鉄ビル内にありました）にいました。まもなく田坂氏は東北学院にいきまして、肺結核になりました。終戦前後、何年間か闘病生活をされ、奥様が働いて生活を支えていましたが、戦後、体が大分回復してきたというので、先程申しましたように、中央大学の方へ招かれて生活も安定しました。大変な喜びようで、私に是非会いたいから、もしできたら新宿ぐらいまで出てきてくれということで、新宿で会ったこともあります。そのころ蒲生（礼一）さんが中心になってコーランの研究会というのをやっております、それに田坂君にもはいつてもらおうということになり、田坂氏も大変喜んで加わりまして、何回か会ったことがあります。場所はどこであったのかよくは記憶しておりませんが、なんでも池袋から少し私鉄ではいったところのテヘランという喫茶店でした。この名前がおもしろいというので選んだのです。そこで会合などしたことがあります。ところが肺結核の方はだいたいは治ったけれどもまだ回復が十分でないから、生活も安定したことだし、こちらで外科手術をして、その患部をとって元気になって研究したいというので手術したいのですが、かえって結果が悪く、それで亡くなりました。田坂君の後任が嶋田襄平君であります。中央大学には松本さん以来イスラム研究の伝統があったのです。とにかく松本さんという人は、この日本でアラビア語を最初に研究した草分けであります。アラビア語研究の業績があるのかないのかそれはよくわかりませんが、戦後などは相当老齢になっておりました余談ではありますが、京城大学のときの弟子だった中央アジア史の嶋崎昌氏をも中央大学に迎えました。本当に昔風の自分の弟子なものですから、「君、たばこ買ってきてくれたまえ」といった調子だったそうです。しかし晩年はきわめて寄るべのない状態で、自分の教え子の一人に、おれの退職金も何もかも皆君にやるからおれの老後を見てくれということで、七十才になったとき、その学生の家にはひきとられて、そこで亡くなられたというような話を聞いております。この先生の次は何と言っても小林元君でしょう。この小林元君と私が知り合いになりましたのは学生時代です。私は東洋史の学生だったのですが、実はマルコ＝ポーロの研究をしたいと思っていたけれどなかなか研究の方針がまとまらなかった。そこでちょうど主任教授の藤田豊八先生のお宅へ相談に行きましたところ、「君、マルコ＝ポーロをやるより中国のイスラム教のことをやりたまえ。中国のイスラム教はたいへん重要問題だけれど、あまりやる人がいないのだ。」というようなお話でした。そこでその時に貸して下さったのが、フランスのダブリー・ド・ティエルサンのマホメッティズム・アン・シーヌ（支那におけるマホメット教）という二巻の書物でありました。たしかこれは大正十四年か十五年ころのことでありました。私はこれを読んでみましたが、それがイスラムというものに関心をもった最初でした。それでそのころ設立された駒込の東洋文庫に通いまして、いろいろその関係のものを読みました。藤田先生は京都大学の桑原隲蔵先生と親交がありました。京都の三高時代の同窓生だったということで、よく桑原、桑原といっておられました。この両先生の研究には共通の主題が多かったように思います。例えばマスウーディーの「黄金の牧場」、それからバリーの年代記など、みんなフランス語訳がありますが、ああいうものが東洋史研究に役に立つと

いう、いわゆるアラブ資料の重要性を最初に言い出されたのは、おそらく桑原隲蔵先生と藤田豊八先生ではないかと思えます。しかも両先生は深く中央アジア史をも研究しておられましたので、それにこういうアラブ史料を活用しておられました。白鳥庫吉先生も同じであると思えます。そして藤田先生は「君、東洋文庫にマスウーディーの黄金の牧場、それからタバリーの年代記というのがあるからあれを読んでみたまえ」と指導していただきました。マスウーディーは九冊あるし、タバリーのペルシャ語訳からの仏訳本は四冊ありましたが、それらを読んで、だんだんアラブというものにひかれ、はじめ中央アジア史を調べていましたが、段々にアラビアとかアラブということの方にもっぱら心がひかれるようになりました。それでそのころ山岡光太郎さんのアラビア縦断記だとか、ミューアのマホメット伝などを神田の古書店で買いまして、アラビア史の研究に、いわばのめりこんでいくようになりました。その頃東洋文庫にいった何かを読んでおったら、石田幹之助先生が（あの先生は晩年は洋服を着ましたけれども）昔はいつでもこう颯爽とした和風姿でおられ、紋付の羽織に、はかま白足袋というお姿でおられましたが、奥の方から出てこれられ、君に一人紹介したい人がいる、今ちょうど来ているからといって小林元君を紹介してくれました。小林君もそのころ和服を着ていまして（夏だったのでしょう、白がすりを着て）はかまを長めにはいて、「おれは東大の西洋史だ。アッバース朝を卒論にやろうと思っている。こういう方面をやっているのはほかにはいないがね」というようなことを言いました。それが小林君と知り合いになった最初でした。それからまあ二人でいろいろ話をし、やはり直接にアラビア語の史書を読む必要がある。アラビア語の史料を読むためにはアラビア語を勉強しようじゃないかということになりました。ところが当時は今と違ってアラビア語の先生が全然見つからない。松本重彦先生がおられるということを知りましたが、そのころはすでに東京にはおられなかった。大阪か京城だったろうと思えます。東京にそういう先生がいるかどうかわからぬが、探せばどこかにいるかも知れぬ、ひとつ搜してみようじゃないかということでした。小林君が「明治神宮の近くに門口にアラビア文字で表札を書いている家がある。あそこに頼みにいこう」というので、二人で行ったことがあります。なるほど、行って見ると、しもたやの表札にアラビア文字で書いてありましたが、小林君も私もどちらもそれが読めません。小林君が「僕が聞いてこよう」といって中へはいって行きました。しばらくして出てきて、「だめだそうだ」と言い、あとくしゃくしゃくしゃと何か言いました。どういうわけでだめだったか、昔の話で、はっきりとは覚えておりませんが、何でもトルコ人だと言ったように思います。とにかくアラビア語は駄目だそうだということでした。それから女子学習院の教授だった荒木茂先生が非常勤講師として、東大の梵文学の研究室でペルシャ語を教えておられました。それを私も聴講しておりましたが、この講義を杉勇さんも聴かれたそうです。ほかには江上波夫君とか野原四郎君とか増井経夫君などがおりました。増井経夫君にその教室で、グルッセのアジア史などを見せてもらったことを覚えております。荒木茂先生という人は、コロンビア大学でジャクソンについて数年勉強してこられた方でした。中条工学博士の令嬢（百合子さん）と結婚して帰ってきたところでしたが、結婚が破局になった。先生御自身は肺結核になりまして、よくせきをしておられました。結婚が破れる、病気がある。先生と

してはまあつらい時だったと思いますが、気の毒なほどおとなしい方なんです。古代の楔形文字のベヒスターン碑文、サーサーン朝時代の中世ペルシャ語やゼンドアヴェスタなども講義したし、それからオマル・ハイヤームのアラビア文字を使っただけの詩の講読などもなさり、古代ペルシャ語からずっと近代ペルシャ語までなさるといふ先生でした。それである日、一つ先生に相談して見ようというので、アラビア語の勉強をしたいのだけれど、どういう参考書を使ったらいいでしょうかとお訊ねしましたが、先生は即答できないと仰るのです。来週まで待ってくれ、調べてくるからというわけでした。次の週間になりますと「ライトのアラビック・グラマーというのがあるからあれがいいでしょう」といふお話でした。それで丸善に行ったらちゃんとあるんですね。二巻ありまして、それを買ったのが私が手に入れた最初のアラビア語の文典でした。それともう一つ、サッチャーのアラビア語の独習書みたいなものを買ったけれど、なかなかアラビア語など読めませんでした。そのうち「中央アジアに於ける唐と大食との関係」といふ卒論を書いて昭和三年に小林君といっしょに卒業しました。それで私は台湾に新設された台北大学の助手になって、同大学文政学部長となられた藤田先生のお供をして渡台しました。文政学部というのは文学部と法学部、経済学部を一つにしたようなもので、理学部と農学部とを一緒にした理農学部との二本建てでしたが、あとになって医学部もおかれまして。四月一日に着任し、間もなくのことでしたが、ドイツのライプチヒにグスターフ・フォックという大きな本屋があり、そのマクス・ワハターという人でしたが、まだその風貌をも覚えておりますが、太った中年の人物でして台北の駅の前のホテルに泊まっておりました。この人が大学にかなり厚いカタログをもってきまして、アラビア文学史やアラブ民族史などを書いたフランスの東洋学者クレマン・ユアールが亡くなったあと、その蔵書をひとまとめにグスターフ・フォックで手に入れたからと云って、つまり売り込みにきたのです。その目録はつまりユアール文庫の目録でした。それでみると今まで話に聞いただけの文献や、はじめて耳にする諸文献や、とにかくたくさんあることがわかりました。どれくらいの分量がありましたか、正確な冊数は憶えていないが相当の分量でありました。アラビア語・ペルシャ語・トルコ語のものをはじめ、欧米の東洋学者の著作も豊富にはいっていました。藤田先生はこの目録を御覧になって「これはほしい。大学は新設で何もないのだからこういうまとまったものをぜひ買いたい。五万円だといふから、これは幣原君（幣原坦総長）のところへ行って相談して来よう」といわれ、総長室にはいっていかれまして、しばらくしてにこにこして出てきて「買うそうだよ。君、ホテルへ行ってマクス・ワハターにそういうことを伝えてきてくれ」といふようなわけで、私は使いにいったことがあります。ずっと後に杉勇さんのお話によると、マクス・ワハターはまず東京に売り込みに来た。東京では買うところがないけれども台北の大学は新設で有望だからあそこへ行ったらどうかと助言した。そういうわけで台北に行ったのだということでした。注文してからそんなにたたないうちに荷がとどきまして図書館へついたということです。行ってみましたら、大きな箱に十五箱くらいありました。私もその一人ですけれども、沢山のアラビア語やペルシャ語、トルコ語などの文献を見るのは、みんな初めてでした。アラビックの文献などはブーラク版のものなどが多く、装釘なども、現在のアラブ諸国の出版物とは、よほど趣を異

にしていました。つまり現今のような新式の製本ではなくて、表紙が折りたたみ式になったものが大部分でした。それからパンフレット類もたくさんはあっておりました。数日たったあとで、また藤田先生から、「君、図書館でパンフレット類を整理に困るから捨てるかといっているけれども何かいいものがあるかどうか調べてきてくれないか」というお言葉がありました。それで私が見に行ったら山のようにパンフレットが床に積まれてありました。当時、私はまだ満でいうと二十四でしたから、学問においても今よりもっと浅かった。今でも大して知らないが、そのころは更に浅学でした。だからよくわからないけれども見ていくとなかなか面白いものが中にある。図書館の方ではどうせ捨てるんだから何でももって行けというようなわけです。私にわかるものはシャバンヌの「西突厥史料」の原典です。あれが表紙がとれてボロボロになっているもんですから捨てるというんです。それからペリオがコレジュ・ド・フランスの教授になろうとした時、ずい分反対があったらしいのですが、その反対派のペリオ排斥のパンフレットなどがでてきて、そんなものも大いに貴重だと思ったのです。藤田先生に「どうもすてるパンフレットの中にいいものがあるようです」と申し上げると、「そういうものを捨てるのはけしからん」と先生がおおこりになったのでしたけれども、結局かなりすてたんです。しかし拾い出したものもかなりありました。クレマン・ユアールの生涯かかってためた文献でしたから、ほんとにいろんなものがありました。彼は一八五四年に生まれ一九一九年に死んだ、いわば旧式のオリエンタリストですから、アラビア語とともにペルシャ語もトルコ語も読みました。イスタンブールに長くいたのでその際に手に入ったトルコ語の文献に面白いものが多かったようです。しかし、そういうものは整理に困るっていうんで、司書の人たちはとにかく一まずのけまして、欧文でタイトルのある分だけの目録をビブリオーテカ・タイホクアーナの一冊にまとめて印刷に付しました。これは探せば今も私の家にあるはずでどこかにもぐっているんですが、一冊の本になるくらいのかんりの量でありました。これには、アラビア語のもの、トルコ語のもの、ペルシア語の現地出版のものははいりませんでした。今も台湾大学の図書館に保管されているそうですが、もう五十余年前のこと、昭和三年のことです。

## (二)

一方小林元君についてですが、ここに小林元君の名著があります。これは「国際政治と中東問題」という学位論文でありまして、前の防衛大学の学長猪木正道先生が京都大学の教授時代に審査員になって法学博士を送ったものです。この本は小林元君が亡くなってからあと発行されたものですが、この本のあとがきを山名吉鶴が書いておられます。それによりますと小林君は昭和三年東京大学文学部西洋史学科を卒業し、日本大学、国学院大学、駒澤大学各教授、のちに陸軍士官学校教授を歴任しとあります。その昭和三年の夏ですが、私は四月台北に行つて夏休みに東京に帰ったとき、かれは「アラビア語の本も少し買おうと思っているのだ。何某が向こうにいったからこれだけは是非買ってくれとたのんだ本がある。それはアブル・ファラジ・アルイスファハーニーのキターブ・アル・アガーニーとアラビアン・ナイトの原典とである。この二つだけは忘れずに買ってきて

くれと頼んだ」と言っていましたから、当時の小林君はいわば文学づいていたことがわかります。アラビアンナイトとかアガーニーなどを読もうと思っていたのです。のちにこの人は中東問題とか国際政治の方面へ深入りしていったものですから、山名氏も「小林君がもっと長生きしたらば（昭和三十八年に五十九歳で亡くなっていますが）彼はおそらく政界に入ったろう。この学位論文をまとめあげたある日、自分の学者としてなすべきことは一応終わったように思う、これからは広い天地に出て、国家民族のために献身したいと思っていると語った」とあります。「あるいは日本ではこれも希少価値である、学者の政治家があらわれるのではないかと私には心残りに思われる」ともあります。小林君にはたしかにこういう傾向はありました。もし小林君が病魔に屈せず、なお活動を続け得たならば、おそらく政界に進出したのではないかと私にも思われるのであります。これはたしかに小林君の一つの傾向だったけれども、最初はとにかくアガーニーやアラビアンナイト原典がほしいといっておりました。このことを私ははっきり覚えておりますし、文学の方へも強い興味をもっていたことは否定できません。それから弟さんが小林正という方ですが、この弟さんのこともよくいってまして「おれのうちはどうも語学の才があるらしい。弟は仏文学をやって、東大の方へ残ることになった」といって喜んでおったことも覚えております。そのころの小林君の家に、私も一、二回いったことがあります。渋谷の駅からは南の高台の上にありまして、かなり大きな邸宅で、お父さんはたしか代議士かなにかしていらしたように覚えております。だから政治ということにはこの人は強い関心があった。これがこの人の学究一筋だけでなく、政界にも関心を深くしていた原因ではないかと思えます。それでなんとか陰口もいわれた。彼にははったりがあると悪くとる人がいました。しかしずい分仕事した人です。私の方は台湾にいきまして、よくいえば地味だけれど、うだつの上らぬあんまりぱっとしない生き方をしてきました。それで小林君からは「細々とやっている男」というような批評を受けたことがあります。

昭和七年に、小林君から来信があって、東京にイスラム文化研究所というものをつくったといってきました。内藤智秀、それから慶応の若手の飯田忠純とか、このときの名前を何人か私はひかえておったんですが、「イスラム文化」という雑誌を出すから、ついては君も同人にいたいから協力せよという手紙をもらったことがあります。けれど私は昭和四年秋に神田喜一郎先生のお供して福州へ旅し、あそこワセキの鳥石山房という名のキョウ龔という旧家の蔵書を台北大学のために買いに行ったことがあります。その時、一月ぐらい、神田先生と旅をしている間に、当時の示那学の醍醐味というようなお話を聞かされまして、中国につよく心を惹かれました。例えば、あそこには陳という旧家がありまして、陳ボーシン宝琛という満州国の元老の一人になった人の生家であります。壁に韓愈カンユの長詩が書いてありました。神田先生は前嶋君この詩が読めるかといっているいろいろ説明してくださいました。このようにしていっしょに旅している間に、これは中国のことを勉強しなくては、どうもならんという気持ちになって漢籍に没頭するようになりました。それで東京で「イスラム文化」という雑誌が出るというので、折角、同人に加えられても、とにかく台湾にいるんですから、今と違って船で行き来している頃です。



それで何か遠い世界の出来ごとのように考えておりました。この「イスラム文化」という雑誌は一冊持ってるんですが 今日持ってこようと思ったけれどどこかへしまい忘れてしまって いまに探し出そうと思います。それに小林君がオーディジオというフランスの学者の書いた「ハールーン・アルラシード伝」(ガリマール社発行)の書評を書いていましたが、これが、大変面白かったことを思い出します。この雑誌はおそらく日本でイスラムと名乗って出した最初のものではないかと思います。昭和七年十一月に発行になっておりまして、白い表紙の本で、飯田忠純君などもアラビア地理学について書いておりました。この人はイスラムの法学・地理学のことでなかなか面白い研究をした人ですが、慶応のイスラム研究では先駆者であり、その後から井筒俊彦さんのような逸材が現れております。井筒さんと飯田さんのつながりを井筒さんから聞きたいと思っておりましたが、まだ果たしておりません。飯田さんは富山房と関係がありまして、神保町の富山房へ行く途中で急に脳出血を起こしてしまいました。三省堂の近くかどっかで道端に寝ころがっておった。通行人はよっぱらいだと思って放っておいた、それで手おくれになってまだ四十にもならぬうちに亡くなりました。おいしい人でした。もしこの人が長生きしていれば、おそらく慶応で、イスラム研究の新局面を展開したことであろうと思います。もっとも慶応では内藤智秀先生も講師として来ておられたとのことであるし、それから松本重彦先生も大阪外語に行く前にこうしか何かしておられたことがあったと聞き及んでおります。また「イスラム文化」という雑誌は第一集だけでおしまいになりまして、それから今度は、五年ばかり遅れまして昭和十二年頃の(一九三七年)イスラム文化研究所が改組されてイスラム文化協会となりました。そして「イスラム」という雑誌を出しはじめた。イスラム、かっこして回教文化、この頃から回教という言葉をもっぱら使うようになりましたが、誰かが回教という方が通りがよいと主張したためとかです。それで三ヶ月に一回くらいに「イスラム」を出しました。この方は少しは続いたんですね。翌年の末くらいまで続きましたから幾号かを重ねました。この雑誌は「イスラム文化」より少し形が大きかったが、厚さは「イスラム文化」ほどはありませんでした。これも私は揃えて持っておりますが、これまたどっかにひそんで探し出せません。そのうちに大整理をしまして探し出そうと思っております。それからその間に戦争が拡大して、イスラム対策または回教政策というものが大分問題になってきました。それで大日本回教協会が組織された。そしてその年からですね、昭和十四年四月から、月刊で「回教世界」これは実は創刊号をここ持って来ました。「回教世界」第一巻第一号、昭和十四年四月十日発行です。そしてこの組織には軍人なども大分入っておりました。この第一号に題字を寄せたのは林銑十郎、小笠原長生、頭山満、葛生能久、松島肇などの諸氏であります。

この協会の事務局は、九段の方から三宅坂に行く途中、つまり和田倉門前を少し右に入ったところにありました。「発刊に際して」という文章が巻頭にありますが、その内容を見ましてもわが国と回教圏との接触は且浅く、回教圏の存在さえも閑却されがちのありさまだった。しかしわが国が東亜新秩序の建設に邁進している今に於いては、回教圏との親善関係を是非樹立しなければならぬ。それにはまず回教の依存する宗教的本質を検討考究しなければならぬと力説しております。

この第一号に去年（一九七七年）の八月急死した川崎寅雄氏が「回教の王都カイロ新生譜」という一文を寄せておりますが、川崎氏は昭和のはじめ外務省が送りだしたアラビア語研修生のその最初のグループの一人で、そのうちに中の英治郎氏、田中（秀治）前サウジアラビア大使とか大原與一郎氏などを挙げる事が出来ます。非常に文才に恵まれた人で、この一文はおそらく川崎氏の発表した最も早いものの一つと思われまゝ。またハッジーになりました鈴木剛氏が「聖地メッカ巡礼」というのを書いております。これは後に単行本になりました。鈴木剛氏はメッカ巡礼に三回も行きました。私も会ったことがあります。昭和十九年頃、南方で戦死しました。そしてここに面白いピラがはいてあります。これに大日本回教協会としてありまして、「一、本協会発行の機関紙「回教世界」、パンフレットおよび単行本は本協会会員に限り、無料配布するものとす。二、パンフレットは回教諸問題に関し、邦人の認識を深むる目的をもって発行し、希望者、関係者等に無料配布するものなり。パンフレット中に秘取扱注意とあるは、動もすれば、外国人に曲解せられ、今後における回教工作に支障を生ずべしと思わるるものにして、外国人の手に渡り、また閲読を許さざることを意味するものなるに付右御含みの上、特別の御取扱を乞う。尚邦人識者に対しては、パンフレットの趣旨は努めて御認識を乞い度き考に付、最寄の方々には成るべくその要旨御伝えを願う」としてあります。こういうところからみても戦争中の回教政策ということの一面を窺うことが出来ましょ。さらにまた「機関紙「回教世界」は会員以外には有料なるも、当分の間、無料配布すべきに付、講読希望者は申し込まれたし」とあります。こんな立派な雑誌を無料配布したのでした。代々木上原にモスクができましたのもこのころでして、その時にサウジアラビアからはハーフェズ・ワハバという駐英公使がそのために来日されましたが、中々の知識人でありました。またイエメンからは当時の国王イマーム・ヤフヤーの王子の一人が来られました。そうするとその王子の伝記みたいなものをパンフレットで出すという風でした。中野英治郎氏が、昭和十四年三月から四月にかけて駐エジプト公使横山正幸氏や三土知芳氏（当時商工省技師）と共にリヤドを訪問したときの記録「アラビア横断記」もこの雑誌に連載されたものであり、これは昭和十六年に明治書房から「アラビア紀行」という題で出版され、幾度も版を重ねました。また石田幹之助氏や八木亀太郎氏なども、これに寄稿しております。八木氏は、言語学者で、ペルシャ語を流暢に話しました。この人と私は東亜経済調査局で同僚でした。戦後は郷里松山にかえり、そこの商科大学の学長となりましたが、最近の消息は知りません。その他、多くの人が執筆し、今、読みかえしてみると、中々、興味深いものがあります。

大日本回教協会よりも一年先の昭和十三年五月に大久保幸次先生を所長とする、回教圏攷究所というものが目黒白金に作られました。そのとき私はまだ台湾にいましたが、七月夏休みで帰ってきまして、そこを訪れたことがあります。大久保先生が所長、小林元君が研究部長、それから松田寿男君が資料部長というのでして、まだ野原四郎君などが参加していない頃でした。普通の屋敷風の家をちょっと改造したものでしたが、岩永博君とか、宮城良造君などあの人たちはまだ若手で大学を卒業したてでした。これらの若手がそろっており、活気のある研究所だと思いました。資金は善隣協会という財団法人、あそこに徳川義親公とい

うトルコ大使をした人がいて、大久保さんがトルコへ行かれたとき、同大使の世話になってそれで親交を結んだ。その徳川さんの口ききなどあったと聞いておりますし、もっとも大久保さんの家も徳川家譜代の由緒深い家柄でありました。それで昭和十三年七月から月刊で「回教圏」という雑誌を出しはじめました。一号から私、もっているんですが、一号は見つからなかったのですが、これは第一巻第四号で、昭和十三年十月の発行なんです。「戦いに関して」という丁度戦争中のことらしい特集号です。西井光男という方、今どこにおられるか知らないけれど、その人の「バドルの戦の意義」、大久保先生の「サカリアの海賊」、岡島誠太郎氏の（この人はエジプトの研究をよくしておりましたがわりあい早く亡くなりました。日本に於けるエジプト研究の先駆者の一人と私は思っております）「トゥール・ポワチエの戦い」。野原四郎氏の「ヤクーブ・ベグの研究」などもはいています。それから原種行という西洋史の専門家ですが、「ダルダネルス防禦戦」、江口朴郎さんが「ドイツ帝国とトルコ」、それから私が「突騎施の戦歴 蘇祿伝」を書きましたが、これは次の号にも書きました。蒲生礼一さんが「カルバラの戦い」、それから宮城良造氏、これは大久保さんの秘蔵弟子みたいな人でして、確か駒澤大学を出た人ではないかと思いますが「コンスタンチノープル攻防戦」を寄せています。宮城氏はコーランがどういう風に翻訳されたかを後にこの雑誌に連載しました。それから大久保先生のコーランの訳ですが、これと一緒にして、「コーラン研究」として後に本になりました。宮城氏はたしかフィリピンだったか、ボルネオかあちらの方で戦死したんです。若手で非常に有望な人だったんです。それから「武将略伝」というのがありまして、それにアムル＝ピン＝アース、クタイバ＝ピン＝ムスリム、ムハンマド＝アリー、ムハンマド＝ビン・カーシム、イブヌル＝カーシム、ターリク＝ビン＝ジヤード、オスマン＝パシャ、馬仲英などが選ばれております。それから、蒲生礼一氏が、「ペルシャ語文法初歩」というのを書いていますし、大久保氏と小林元氏でコーランの一部を共訳しているのです。小林氏はアラビア語、大久保さんはトルコ語の大家だったんですから、二人で共訳したのは面白いですが。後にこの二人はある感情問題で決裂したですね。それで小林氏は研究所を出た。この話はしていいものかどうか 岩永博君が小林君と一緒に出た。これを小林君がずっと後まで岩永という男は大変義理固い男だ。おれについてやめたとよく話しておりました。後に岩永君と戦争がすんだ後で、終戦後はこれまでの会はずっかり消滅してしまったんですが、その時に私と三人でひとつイスラムの研究会をもちたいと話がまとまりました。三人の家を順ぐりにまわって、つきに一回くらいの研究会をしておりましたが、そのうちに小林君は中東調査会というものを組織する。私は慶応へつとめるようになりましてし、岩永君は法政大学へ、私よりもっと早く行きました。小林君は大東文化大学の教授だったと思います。しかし中東調査会の方へ非常に力をいれておりましたが、それには山名義鶴という代議士の後援もありました。そのことはこの本（国際政治と中東問題）に山名氏が書いております。あのような研究機関を設立したのは、小林君の大きな功績の一つではないかと思えます。ところが小林君は惜しいことに喉頭癌にかかりました。その少し前の昭和三十五年にはモスクワで国際東洋学者会議が開かれ、それに出まして中央アジアの方を旅行して帰ってきました。そのまえにはアメリカ国務省に招かれてアメリカの中東

関係調査機関を歩いて、帰りにエジプトへ行きました。そのとき牟田口さんに大変お世話になったと言っておりました。喉頭癌が発病したのは、その三十五年の旅の後だったように思います。昭和三十八年七月三日に五十八で亡くなったのです。私は昭和十五年五月に台湾から満鉄東亜経済調査局へ入るため、東京に帰ってきました。実は十四年に満鉄に入ることになったんです。十四年夏北支に旅行し、帰途東京に来ました。小林君はまだその頃「回教圏攷究所」におりまして「君を回教圏にひっぱることにした。是非こい」というんです。その二日か三日前に東京へ着くと、親戚のうちに東亜経済調査局にいた私の友人から東拓ビルへ行って大川周明氏に会ってという手紙が速達できておったので、東亜経済へ行っただけです。そしたら最近オランダのブリルから回教文献、これはフランスのガブリエル・フェランと、ドイツのモリッツという二人の旧蔵書を十五万円でまとめて買った。その本がもう横浜についている、だからそれを使って研究する人がほしいから帰ってこいという話でした。待遇もいいし、その他の条件もなかなかよかったものですから。私はそこへ行こうと思っておったのです。そしたら小林君から会いたいというのでそれで渋谷の東横の一階、今は売場になっているが、昔はあそこは勝手に通行できるようになっていました。現在の国電の北側、宮益坂寄りの旧館のあるところですよ。あそこへこれこれの時間にきてほしいというわけですよ。そこへ行ったら小林君は勿論おりましたが、大久保先生も、紋付羽織に、袴をはきステッキをつき鼻の下にはひげを蓄えてさっそうと出てこられました。そして二人して回教圏攷究所に入れってというんです。それで私は実は満鉄の方からも話があるので、実はそっちの方へ行きたいですと申しました。小林君は大分文句を言いました。君はイスラムの学問で立っているんだから回教圏へ入るべきだというようなことを言ったんです。大久保さんの方はわけを話したら、それは君やっぱいい方へ行きたまえとわだかまりなく言ってくれました。それで私は満鉄の方へ入ったんです。小林君はちょっと感情を悪くしたらしかったのですが、あとで私に打ち明けてくれました。実はあの時に大久保さんと自分との間が険悪になっていた。だから君を緩衝地帯としてひっぱればうまくまとまると、それで入所をすすめたんだということでした。小林君という人は淡々とした性格の人でありまして、あとではそうやって打ちあけたくらいですが、結局大久保さんとの間は決裂状態になり、間もなくやめました。大久保さんに弟さんがおられました。その弟さんが小林と一緒にいちゃいけない、別れろっていったというのです。肉親の言うことというものは大変強いし、どうしようもなかったのだと小林君は申しました。それで小林君は間もなく陸軍士官学校の教授になりました。この山名氏のあとがきによると陸軍士官学校の教授になったために進歩的な学者たちから攻撃されたというのですが、まあ戦争中のことですから。そのころの小林君は名士の一人でした。このような打明話をするのも故人をなつかしむあまりと御許し願いたい。生きていうちにしておかないと永久の謎になってしまうおそれがあります。とに角、台湾から帰って来て見ると小林君は大変有名になっていました。ある人が私にある叢書の編集を頼みたいと云って来ました。一緒に監修にあたるいい人ないかっていうので小林元君を知っていると云ったら、あんなえらい人を知っているのか、見直したと言うんです。それで小林君に話してどっかで会食したところ、向こうはもう小林先生、小林先生と大変あがめている。さては彼はこ

んなに有名になっていたのかと、私は驚きました。戦争中の彼はまことに風雲に乗ったような有様でありました。あのころ総力戦研究所というのがありました。占領政策シンポジウムみたいなものやりたいと、堀場大佐という人が中心になって、小林君が相談相手になっておりました。君にもムスリム・アラブ人の大征服の際の占領政策を書いてもらいたいというので、私も何十枚か書いたのです。種本にはバラズリーのフトーフ・アル・ブルダーンを主に使いました。すると小林君は「君のは大変よく出来た。最高の謝礼をやることにしたよ」と批評してくれました。そしてその発表をやるから出てくれというのです。行きましたら、今考えると面白い顔ぶれがそろっていました。とにかく大学で歴史を専攻した日本史、西洋史、東洋史各分野の人たち三十代くらいの人が二、三十人ならんでいました。のちに有名人になった人たちも少なくありませんでした。それが一人十分ぐらいずつ発表するのです。正面を見ますと東條（英機）大将がこう坐っていましたし、三笠宮殿下のお姿も見えました。まだお若いころのことで、軍服姿でおられました。あのころ次々に立っては御前講演式に話した少壮の研究者も、約四十年の星霜をへだてた現在では、世を去ったものも多いし、生きている者も、大部分は現役を退いております。私なども、まだ三十代で、元気さかりでしたが、もうとうに古稀を越えました。堀場大佐の回想録が芙蓉書房から刊行されましたが、この本の中にも、総力戦研究所のことが詳しく書かれております。私どもはあそこの所員になったわけではなくて、小林君の推薦で、それぞれ専門分野の研究を発表しただけのことであり、古代から近世まで、各時代にわたっておりました。帰りにはご苦労さんでしたというんで金一封をみんなもらいました。あけてみると五十円あった。みんなびっくりしてしまった。五十円くれたってわけで、急に金持ちになったみたい……。あのころの五十円は大金でした。こんなことも今はなつかしい思い出となりました。戦後の小林君には確かに山名さんが言っていた通り進歩派の人たちから白眼視され少しく不遇時代というべきものがあつたらしい。総選挙に立候補したこともあるのです。私の家のすぐ近くに大宮小学校がありまして、そこで候補者の政見発表というのがありました。小林君も来るということでした。しかし行くひまがありませんでしたので、彼の政見を聞かずじまいでした。かなり票が入ったという話でしたが、結局、落選したんです。そのころです。岩永君と小林君と私と三人でもって研究会をしようということになったのは。私の家にも二人が来たことがあります。わたしの息子がそのころまだほんの子供でしたが、それが外から走りこんで来て門のところにチャップリンがいるよっていうんです。出て見たら小林君なんです。ちょびひげを生やし、ステッキをもっていたので、子供の目にはチャップリンに見えたらしい。そのうちにあの人はだんだん研究生活に戻って行ったし、中東調査会とか、ああいうものをつくりあげた。他の人にはなかなかできない仕事だと思えます。昭和十五年に台湾から私が帰ったときに、有栖川宮奨学資金をもらって昔からの日本と回教圏の文化交流の歴史をまとめたという話をしました。これは原稿で残っており、小林君の遺稿の一つになりまして、昭和五十年にまだ土田豊さんが中東調査会理事長のときにこういう風に印刷に付しました。確かに日本のずっと昔からの回教圏との文化交流というものをまとめたものとしては大変よくできている。ま、当時の文章ですから、少しは硬いかもしれませんがよく調べてあります。昭和十三年には外務

省の調査部でもこれも年に四回、機関誌として「回教事情」というようなものを出し始めました。それから満鉄の東亜経済調査局では坂本徳松君が編集長になりまして月刊で「新亜細亜」を昭和十四年八月から出しはじめました。これは新亜細亜の創刊号です。米田實氏が「パレスチン問題と英国の苦境」を、大川周明先生が創刊の辞を蒲生礼一氏が「宗教的に見たイラク国」、大久保武雄氏が「イラン国の全貌」をそれぞれ執筆しています。大久保氏は自分で飛行機を操縦してイランを訪問した人です。外交官の笠間泉雄氏が「夏の砂漠に行く」（イラン・イラク踏破記）を、野口米次郎氏が「印度の眺望」を書いております。それから「復興亜細亜の諸問題を語る」という座談会の速記録がありますが、これに出席した人たちの中に小林元氏も入っております。そのほかには木村日紀、高岡大輔、嘉治隆一、矢田部保吉諸氏の名も見えます。この「新亜細亜」もこれから終戦前までずっと続きましたが、「回教事情」の方は、今日、第一号などを持ってくることが出来ませんでした。ここに昭和十五年十二月発行の第三巻第四号があります。外務省調査部は著者ということになっており、発行所は改造社で、一冊の低下が五十銭としてあります。この雑誌は執筆者の名を示さないのが特徴で、論説として「仏領印度支那の回教」「印度と其西北国境問題」「林則徐と其回教徒政策」という三篇があり、そのあとに「資料」「解説」「彙報」などの欄があります。

これらのほか東亜研究所からも、種々のイスラム研究の刊行物が出ております。またこれら諸機関のイスラム研究者たちを、外務省の同じ方面の担当者たちが、定期的に招いて「回教懇談会」を開き、春秋二回にはその大会を開いたりしました。こうして終戦時に及んだのですが、このころが、わが国に於けるイスラム研究の第一のブームであったろうと思います。第二ブームが、先次の石油ショックの際からはじまって、現在に及んでいるものということが出来るのではないのでしょうか。

#### 〔前嶋信次先生の略歴〕

明治三十六年七月二十日、山梨県の旧医家に生る。郷里にて中学校を終え、上京、東京外国語学校（今の大学）仏語科文科に入学（大正十年）。大正十三年東京大学文学部東洋史学科に入学。昭和三年三月、同大学卒業。渡台。台北大学文政学部助手となる。昭和十五年六月満鉄東亜経済調査局に入り、西南アジア班所属、調査班として昭和二十年末に及ぶ。戦後、慶応義塾大学言語文科研究所員となりついで、文学部講師となる。昭和三十一年より同大学教授（文学部）となる。兼言語文化研究所長を経て昭和四十六年三月末、定年退職。同四月一日より同大学名誉教授として現在に至る。

現住所 東京都杉並区和泉三ノ五十三ノ十一

## 外務省アラビア語研修のはじめ

大原與一郎先生にきく

とき 昭和五十四年九月八日  
ところ 大原先生御自宅・京都市左京区下鴨神殿町一  
ききて 池田修

- 池田 先生がエジプトに行かれたのは何時ですか。  
大原 大正十五年です。総領事館が出来たばかりの年です。郵船の欧州航路のためにポートサイドに領事館が出来ており、留学先がどこかわからなかったということはなく、はっきりしていた。総領事館はアレキサンドリアにあり、私はそちらに行った。なんとも行ってもポートサイドはエジプト全体でみれば小さく、アレキサンドリアの総領事館が公使館を兼ねたような存在でした。
- 池田 外務省でアラビア語研修生として派遣されたのは先生が最初ですね。民間からの研修生は来ていませんでしたか。  
大原 民間からの研究生は誰も来ていませんでした。  
池田 そうすると、研修のやり方は最初から開拓なさったわけですね。  
大原 総領事はフランスから来た方だし、奥さんはフランス人で無理もないことかも知れないが、来た留学生が適当に開拓せよ、ということだったかも知れません。こちらは若かったし、総領事館に行けば色々決めてくれているだろうと期待していた。が行って見たら下宿だけは決めといてくれた。しかしそれはユダヤ人の家庭で、一年位でここでの下宿は出てしまい、そのあと田村（秀治）君と一緒にシリア人の家庭に下宿した。クリスチャンでアラビア語は勿論話すが、回教徒とはやはり少しちがい、ほんとのことを言えば最初から回教徒アラブのところの下宿しておればよかったと思っている。
- 池田 最初の事でご苦労が色々あったと思われませんが、外務省の方で先生を派遣されたのには何か事情がありましたか。  
大原 総領事館も出来たし、将来アラビア語が必要になるということで募集があったものと思う。僕は最初はアラビア語ではなくスペイン語を出した。というのは英語をやっていたし、スペインなら南米にもいけるし、これを第一にして出した。そしたらその時の人事課長の堀田さんという方がスペイン語は東京外語出の受験者が数名いる、今、外務省として一番期待を持っているのはアラビア語である、ということはスエズ運河を船が通るし、地中海経由のイタリア、フランスなどとの貿易の発展に重要なところだ。ところが日本にはアラビア語をやっている者が誰もいないんだ、とこういう訳です。アラビア語をやれば将来広く活動も出来るし、有望だ、行かないか、と言われた。総領事館も出来たし、将来有望であるなら、と思ったが、すぐには返事をせずに一たん帰ったんです。西本願寺の僧侶であった父が、島津製作所の

島津源蔵<sup>げんそう</sup>さんという方を知っていて、息子が外務省の試験を受けて合格した、スペイン語を希望したのだがアラビア語はどうかと言われていたがどうしたものだろうか、と相談をもちかけた、島津さんは、誰もやっていないということだし、将来有望だということならやらせなさいというご意見だった、ということで僕も決心したんです。早速、京都の丸善に行ってみたんですがアラビア語の本はない。外務省に聞いても分からない。新聞も来ていない。はじめての事をするということだし仕方ないと思った。そしていよいよ郵船の船で行くことになり船に乗ったところ、トルコ人が乗り合わせておりアラビア語というのはこういうものだと言って本を見せてくれた。あゝこういう格好のものかと思って行ったところ、シンガポールに着くと出口、入り口をアラビア語で書いてあるんです。そんなことも知らなかったんですが、それからアレキサンドリアに着いたのです。着いて紹介してくれたユダヤ人の下宿で、面白くなかったので一年足らずで出てしまったんです、それから田村君と二人でシリア人クリスチャンの家に一年いたのですが、三年目は田村君とわかれて、僕はロシア人の家庭に入ったのです。ここではアラビア語を習うために入ったのではなく、フランス語でも習うつもりだった。というのは、ナポレオン遠征以来の影響でフランス語は今以上に広く使われていた。当時はイギリスの支配下にあったが、英語は毛ぎらいされていて、アレクサンドリアの外事課長さんは僕が行った時、あんたはフランス語を話さないのかと言っていた。何故か、と言うと、英国兵がおって、われわれエジプト人は英語があまり好きではない、という訳です。こういう次第でロシア人の家庭に入った、家族同志はロシア語で話すが、息子や娘はフランス語の学校に行っていてフランス語を話していました。

池田  
大原

最初は小学校に入れられたんですね。

最初はユダヤ人の下宿のすすめでユダヤ人の学校に入った。ユダヤ系エジプト人の子供のための学校ですが、そこの方が下宿の主人の言うにはまだアラビア語がよく分からないのもいるし、はじめてやるには好都合だということです。そこなら自分の口ききで入れてもらえる。しかし、僕が行った頃、アミーリーヤ、つまり国立の小学校はアレキサンドリアで二校しかなかった。ラアスツターンとモハッラムベイの二校です。この国立に入るには手続きがうるさい。そこでユダヤ人の学校に行ったのです。ここではアラビア語のシェイフ（先生）が来ていて教えるのですが、これは寺子屋式で暗唱方式、むちを持っていてなぐるやり方です。毎日覚えて来いという、覚えて来ないとむちで手をたたくんです。幸い僕はなぐられずにすんだが、こんなことをしていたのではどうにもならない、と思うようになった。と言っても総領事や副領事に話を持って行っても、こんなことは何もしてもらえない。書記生の人でも英語の人だった。それで自分で探しはじめた。結局国立の小学校ではじめからやり直す方がいい。子供の方が外人と思わ



ずにつきあってくれるし、こういうことでモハッラムベイの小学校に行った。ここに一年ほどいた。はじめはアラビア語だけやって、あとのほうで歴史や地理をやった。コーランは三回くらい出たが、先生があまりいい気持ちを持たなかったようです。回教徒になるならいいのだが、そこまでこちらは覚悟していなかったのです。

国立中学校はアッパーシーヤにしかなく、国立小学校で一年余りすごしたあとここに入った。

池田 ユダヤ人学校やアミーリーヤに行かれたとき、科目はご自分で選ばれたのですか。

大原 ええ。ユダヤ人の学校ではアラビア語の授業だけです。毎日行った。毎日一時間か二時間です。太ったシェイフの授業を受けていたのです。モハッラムベイに行ってから歴史、地理、勿論国語の時間も出た。国語の時間は毎日出た。中学の二年と三年、のちには四年と五年の授業に出た。留学期間は三年で、三年では中学がすまなかったのです。総領事館に勤めるようになってからも特別の許可をしてもらって中学に通った。聴講したのは好きだった歴史とアラビア語、特に文法の時間に出ました。が、今でも文法はむづかしい。一人の先生はカイロ大学出で、どちらかと言えば新しい教え方をした。ターバンを巻いた方はフサインという先生で、タハ・フサイン（盲目の大文学者 一八八九—一九七三）に習うなどと冗談を言っていた。一番面白かったのは歴史の時間で、今から考えて見ると、あの先生はアラブではなくトルコ系の人でした。英国で勉強して来た人で、奥さんは英国人。その先生はムハンマド・アリーの時代を中心に近代史を非常に面白く教え、楽しかった。この先生は顔付きがアラブではなく、ひげも生やしていなかった。ただし試験の成績は悪かった。後に文部大臣にもなった校長がいて、僕に出て来いと言うのです。行ったら、君は他の国語や文法の試験はよく出来ているのに歴史の試験は間違いだらけだと言った。ところが歴史は書くことが多くてアラビア語の文法などいちいち考えておられなかった。国語や文法の試験はきっちり答えるが、歴史の方はこちら色々な本で勉強している。野心もあるし、多く書きたいと思うし、アラビア語の文法なんか考えているひまがなかった。それで叱られたんです。一時間の試験のうちに答案用紙三枚くらい書いた。これでなるほどまだまだ勉強しなければ、と思った。

池田 学校以外に家庭教師をとられましたか。

大原 家庭教師ははじめから取った。ユダヤ人の学校に行っている時だけは取らなかった。モハッラムベイに行くようになってからその小学校の先生になってもらった。カイロのショブラの小学校に転任したとき、見送りに行ったらしく、礼状をもらっています。その後、中学の先生にも習ったし、前出のフサイン先生にも学んだ。其のときにマンファルーティーなどを教った。マンファルーティーは学校で学んだのではなく、この先生に習った。そのときブーラク版のアラビアンナイトの本をフサイン先生に見せたら、こんなものはあんたらの様なエ

フェンディーの読む本ではないんだ。これはそこらの労働者の読む本だ。問題にする本ではないと言われた。勉強する本ではないという訳です。その時、人気のあったマンファルーティーの本をあれこれ読んだ。

池田  
大原

アーンミーヤはどうされましたか。

アーンミーヤは特別にやりません。だが小学校でも中学校でも生徒は皆んな文語なんかしゃべりません。日常生活で覚えてしまったんです。最初からクッパーヤト・モヤ（コップ一杯の水）なんて勝手に覚えたんです。生徒の中でわれわれは人気者になり、川崎（寅雄）君なんかターザンというあだ名を付けられた位です。生徒らが家に来いと言うんです。モハッラムベイの近くには、回教徒の家が多く、よく訪問した。当時二十五、六才だったが、若く見られ、新聞には十五、六才と書かれた。今写真を見ても、自分でも間違うほど若いんです。十五、六の少年だから、女性のところでも、問題にしない。しかし後でフサイン先生の家に行くと、ちょっとまってくれと言って女達をサロンから他へ移したりしたこともありました。アーンミーヤはこうして学校の友達との交際を通じて学んだ。ただ最初ユダヤ人学校に入る前、一ヶ月だけベルリッツの学校に通ったが、そこではアーンミーヤだけ教えていた。しかしそれでは役に立たないし、発音もなっていなかった。何しろブラジル人が教えていたんです。総領事館でアラビア語のことがよく分からずに紹介してもらったんで、当時のこととしては致仕方なかった。それから大変苦労して習うところを探した。田村君などあとから来た人たちとはちがって私は損をした。プラスになった面もあったが損な面も多かった。

アレキサンドリアにカーミリーヤという私立の学校があった。総領事は市役所の外事課長にたのんでカーミリーヤを紹介してくれた。勿論アミーリーヤの小学校に外国人が入るなんてことはなかったものですから。しかしよく聞いて見ると中学校まであるがたいした学校ではないようだった。こうなったらしょうがない、ということで、アミーリーヤに頼みに行った。僕がひとりで文部大臣に会いに行ったんです。あの時は夏でした。アレキサンドリアの郊外に政府が移転して来るのです。そこに総領事に紹介状を書いてもらって文部大臣アリー・シャムシー・パシャに会いに行ったのです。それは文部大臣の権限なんです。今でもその人の名を覚えているし、恩義を感じている。非常に親日家、というより、あるいは日本のことはあまり知らなかったでしょうが、日本からアラビア語を学びに来たのか、よっしゃ、ということになってモハッラムベイの校長に紹介してくれたんです。他の国の人はだれも来ておらず僕だけ許してくれた。

余談になるが、税関の役人と知り合いになって、その親が師団長だというので会いに行ったんです。ところがそこで何十匹のノミの大群に襲われたんです。兵宮が砂地でそこへ若くて異息の外人が行ったものだから、ひどい目に会いました。今思い出してもぞっとする。当時

は月四十ポンド支払うと兵役免除になった。四十ポンドと言えは相当の額です。それが払えない連中は兵役の義務を負う。だから兵隊に来ている人たちは上エジプトの人が多かったようだ。

池田  
大原

学校の教科書の他、辞書なんかはどういうものを使われましたか。

(エリヤスの)カームスルアスリーがありました、今でも大事にしているのは、ぼろぼろになっていますが(エリヤスの)カームスルマドラシーです。アラビア語 英語および英語 アラビア語のもです。(ハバの)ファラーイドも用いていました。それ以外にムンジドより少し分厚い、いい辞書があったんです。印刷もよかったが、東京で焼いてしまったんです。アラビア語 アラビア語の辞書でした。フサイン先生はもっと辞書がないかと言うとカイロに行きなさい、カイロ図書館にはおまえがもてあます辞書がある、と言っておられた。辞書ムヒートルムヒートなどのことです。しかし、日本人である君には今もっている辞書で十分でこれが分かればプロフェッサーだと言われた。だが何んという名前の辞書だったか忘れた。もっとも辞書については苦労はなかった。尋ねようと思えば何時でも先生がおられたので。

この間もマムルーク朝の本を読んでいて、どうしても分からないことがあるので、学会でエジプトの方に質問したんですがよく分からないということでした。今まで読んだうち分からないのが二ヶ所ほどあります。大体の意味は見当がつくのですが、はっきりとは分からない。古い難解な古典的なものや、コーランをやっているから。コーランのいくつかの章句や、コーランの文句がよく引用されている教科書など多少はやりましたが、そういう役に立つ本は東京に持って行って焼いてしまったんです。本は多くて疎開できなかった。

池田  
大原

先生がエジプトでアラビア語を勉強しておられた当時、ヨーロッパ人は同じく習いに来ていましたか。

いいえ、来ていなかったです。学生として来ていたのは日本からだけです。企業から出すようになるのはずっとあと、戦後もごく最近のことです。小林オマルという人のことを知りませんか。

池田  
大原

いいえ。

僕がベイルートに行った時のことです。小林オマルという人はエジプト人と結婚し、子供も出来た。アズハルに行っていた人ですが、この人は陸軍からの声がかかりでアズハルに来たのですね、昭和十一年頃のことです。僕は小林君には会っていないのですが、ちょっと悪くいえばアラブ浪人的な野心を持った人物のようでした。トルコ駐在の武官がベイルートの領事館に来た時も小林というのはひとりよがり大きな事を言っているが、出来るのかなあ、と言うので、試験してみればわかりますがな、と答えた記憶があります。戦争になってから比島方面で亡くなったと聞きましたが、亡くなって遺族のことで問題になっていました。向こうから文句が来たのです。

池田

陸軍が正式に派遣していたのでしょうか。

大原 軍が正式に派遣するはずはないので、囑託か何かで派遣したのでしょうか。裏面的援助だったのでしょう。

池田 大正十五年にエジプトに行かれて昭和八年までおられた、それからどうされました。

大原 昭和十一年末まで本省にいて、十二年にベイルートに着いた。本省にいた間は小林君のことは聞いていなかった。

池田 外務省の出先機関は先生が向うにおられる間にだんだん増えましたか。

大原 いいえ、ポートサイドの領事館とアレキサンドリアの総領事館が出来ていた。それから昭和十二年に僕がベイルートの領事館を開きに行ったのです。一月です。十六年夏に帰って来た。シベリヤを通過している時に独ソ戦が始まった。

私のあとが田村君、次が中野（英次郎）君、川崎、代田、林君が次いだと思う。代田君はその後日綿に入った。

留学期間は三年で、僕はもっと研修を続けてもいい気持ちでいたが、横山総領事らのご意見を聞いて書記生に任官した。はっきり覚えていないが留学期間を終えてから五年間は外務省に勤務する義務があった。代田君もそのあと日綿に変わったのではないのでしょうか。義務年限より早く辞めると留学費を返す必要があった。今はそんなことはないが。

池田 初期に行かれた方たちは先生と同じように小学校から始めましたか。

大原 いやいや、最初一年位は小学校に行って、あとからは大学、日本から来る人は大学がすきだった。僕は大学に行っても何んにもならないと言っていた。一人一人に聞いてみないと分からないが、大学に正式に籍を置くというのでなく、聴講生としてであったように思う。いくら一生懸命頑張っても、三年やそこらで、正式に大学の文科を卒業できるはずがない。

池田 先生は松本重彦という方をご存知でしたか。

大原 知りません。

池田 文部省が松本重彦という人を、外務省が領事館を開く二～三年前にアラビア語研究のためドイツおよびエジプト・シリアに派遣し、大阪外語の教授にして、大正十四年からアラビア語を教えはじめているんですが。

大原 大阪外語では中野君が行く前からアラビア語を教えていたことになりますね。

池田 そうです。アラビア語科はなく、インド語科などの学生に教えているんです。ところで大正末から昭和初年にかけて旧にアラビア語をやる事情が何かありましたか。

大原 外務省にはポートサイド・ローマ・ミラノ・マルセイユ・イスタンブールに大使館や領事館があった。当時、日本製品が安かろう悪かろうであのあたりにどんどん出回りはじめていた。こういうものを輸出するのに民度の低い中近東が適当であった。とにかく安物がずいぶん出ていた。コーヒー店で美人の判を押した安物の日本製の小型茶碗

が出回っていました。人絹布と言ってもすぐ敗れるんです。日綿の前身日本綿花は僕が行く前からあった。それかr 亜横浜正金銀行が出来、次いで総領事館が出来た。だから中近東のみならず地中海への輸出が眼目であった。

池田 日本綿花は大正時代にエジプト綿をだいが買っていますが、その見返りという意味では？

大原 綿花は輸入したが、見返りとして売るにはあまりにも悪いものばかりでした。あの時分カネボウが富士絹に力を入れていた。カネボウの店がアレキサンドリアに出来、長崎高商を出た川崎さんという若い人が絹の売り込みに努力しておられた。それが大部成功しかけると三井物産が出て来てさらってしまった。

僕は今でもファード一世の時代のことをよく言いますが、たしかに良かったと思います。もちろんナセルの悪口も言いませんが、生活物資は当時外人としては高かった。屋台店なんかで食べるなど忠告されながら、出て行って食べたことがある。若くて元気だったので病気になるということは考えていなかった。ただナイルの水を飲んで下痢にかかったことがあるが、それがただ一回の病気だった。

池田 日本に帰られてからあちこちでアラビア語を教えられたと思いますが。

大原 東亜研究所の人達十人ほどにアラビア語を教えたことがあります。回教圏研究所の人達も習いに来ていました。二、三よく出来る人がいました。大阪が以後にアラビア語科が出来て中野君が行った。彼が病気になって、次に林（昂）君が行くまでのつなぎに昭和十七年四月から外務省から半年弱教えに行きました。しかし何回も専任にとさそわれたが、そんな気になれなくて、林君を推せんしたんです。その年の秋には林君が来たと思います。中野君を見舞った時、学校の先生というのは月給が安い、その上、学生が飲みに来る。外務省におった時のようにつきあいするので、金が足りなくなると言ってこぼしていました。今はちがいます。

池田 今もあまり変わりませんが、どうも色々な貴重なお話有難うございました。

〔大原與一郎先生の略歴〕

明治三十四年 京都市に生る

大正十五年 外務省アラビア語第一期留学生としてエジプトに留学。アレキサンドリア総領事館、本省通商局、ペイルート領事館、欧亜局、政務局、終戦連絡京都事務局を経て昭和二十二年領事にて退官

昭和二十二～四十年 京都商工会議所理事外国部長

昭和四十年～四十九年 大阪外国語大学アラビア語講師

現住所 京都市左京区下鴨神殿町一

# アラブ史研究の思い出

藤本勝次先生を囲んで

とき 昭和五十四年十月三日  
ところ 関西大学東西学術研究所所長室  
出席 藤本勝次  
池田修  
加賀谷寛  
梅田輝世

池田  
藤本

先生が、最初にアラビア語と縁ができた頃の話をお願いします。  
ああ、そうですか。そうですね、僕が大学に入ったのは、昭和十六年と違いますか？

池田  
藤本

はあ。  
そうですね。十六年に京都に入って、十八年の九月に戦争に行ったのですから。その時に、まあ、あの宮崎市定先生が...宮崎先生という方は、フランスに行っておられて、パリの東洋語学校ですかね？あそこに行っておられて、その、プラッシュェールにアラビア語を習われておられたのですよ。それでまあ、歴史的に中東に関心を持っておられて、講義の中でもいろいろそんな話が時々、出て来たんですよ。ちょうど昭和十六年といえますとね、前嶋（信次）先生がアラビア民族史ですか、タバリーを元にして書かれた物ですね、あれなんかが出ておって僕等も読ませてもらってたんだけども。

それから、昭和十六年、十八年頃になりますと、ちょうど戦争に行く前頃だったと思うんですけど、小林元先生といってね、西亜記というものを出されたんですよ。紙はもちろんざらざらのものでしたけどね。僕らも学生時代に読ませてもらった経験あるんですけどね。小林先生の本は、いわゆる歴史全般でなくて、小さな項目で、エピソードを含んだ本でした。それでまあ、宮崎先生の話もあり、そういう本もあったものですから、まあ、どうせ戦争で死ぬんだから（笑）、変わった事やったろうかという気もあったんですけどね...ともかく宮崎先生に、アラビア語をですね、どんな物かと聞きに行ったのですよ。宮崎先生というのは、あの時分は怖くてね、僕らからしたら話も出来んような雰囲気であったんですけどね。「お前、やるんか」って言われて（笑）、はっきり「やります」とは言わなかったのですけど、「まあ、一遍、やりたい、聞きたい」と言いまして、すると「放課後来い」と言われましてね。で、何をされたかと言いますとね、有名なブローという人のフランス語で書かれたアラビア語の文法書と字引きとを貸していただきましてね、最初にアルファベットをちょっと教えてもらって、それから二日目頃に、「一週間に一遍来い」って言ってですね、第二週目頃に、千一夜物語の子供用に作った薄い、「アリー・

クズヤ物語」というのがありましてね、これはシャクルもみな打ってあるんです、それを貸されてですな、「読んで来い」って言うんですよ。今から思ったら皆さんもびっくりするような事ですね、一回目に文字をちょっと教えてもらって、文法の本と字引き貸してくれてね、で「来週読んで来い」と。(笑) こんな無茶な話、今から思ったらないんですけどね、怖かったですからね、先生は。こりゃあえらいこっちゃんと思ったんですけど、まあともかくそれで、一週間に一遍、放課後、宮崎先生と、怖かったですけど、やっておったんです。で、こっちもそう知識なかったものですから、宮崎先生とある文法、いわゆる動詞の変化で論争しましてね、今から思うと私が間違えとったわけですね、(笑)つまり、動詞の第四形なんかのね、(笑)それでこっちもいったん言い出したんだから退かんと行ってやっておたら、宮崎先生が、一月か二月やったんですか、「お前にはもう教えないから、外大へ行け」と言われまして。あの時は昭和十七年頃だろうと思うんですけど、外大の学長が横山...

池田  
藤本

横山先生、そうですね。

で、宮崎先生が「ともかく紹介状書いてやるから持って行け」と言われまして、それで行ったのです。横山先生は、えらい厳格な人でしたけど、「ともかく来い」という事で、あの時、外大はちょうど林昴先生、今アラビア石油の、まだ若い時におられまして、それから山本...

池田  
藤本

健太郎先生？

健太郎先生か。二人おられましてね。

そこへ無料のもぐりでクラスに入ったんです。そのときは、今の外大のアラビア語の第二回生の時です。だから、あの田中四郎先生はもう出ておられたわけです。

池田  
藤本

そうですね。

で、あの第二回といいますと、楠、仲庭君とか、ああいう人がおられたのですわ。ところが、僕なんか、正式にやっておるわけではなく、本を読む為に必要だったわけですね。ところが外大に行ったところが、ムターラーでしたか、カイロで出た教科書...

池田  
藤本

ああ、ムターラートル・アラビヤ(アラビア語読本)ですね。

ああ、そうですか。で、あれのお伽話のような物をやっておられたんですけどね、私もまあ、やったんですけどね、どうも卒論書くアラビア語の勉強にならんしね、(笑)こりゃあ、えらいこっちゃんと思ってましたが、ともかく行っておりました。そこで、戦争へ行ったという事ですな。

池田  
藤本

何年くらい外大で先生、やられていたのですか。

おそらく、一年少し行っておったのじゃないですか。僕は十八年九月に戦争に出たわけですから、おそらく十八年の初め頃までじゃなかったですか。

池田 それまで、京大では、歴史をやっている先生でイスラムの方をアラビア語で書いた文献でやってられた方は？

藤本 それはなかったですね。京都ではだいたい、あの桑原（隲蔵）先生以来の漢文...

池田 漢籍で。

藤本 それから、中国とアラブの関係だけれども、中国側からやってみようかと...

池田 なるほど。

藤本 で、どこまで行けるかって事は、やっぱり限度がありまして、それをアラビア語から行こう、飛び越してみるといのはね、暴虎馮河ですわね。今から思うたら。そういう事になってしまっていたわけですよ。

池田 その頃、アラビア語の方へ目を向けて、そちらの方からやろうというのは、相当、異端者だったわけですか？そうでもない...

藤本 いやいや、京都大学のシステムとしてはアラビア語を使っているのはいわけですよ。そういう講座というのはありませんでしたしね。ちょうどその頃、外大から、京大に林昂先生が来ておられたのですよ。

池田 はあ。でやっぱり、アラビア語を教えておられたわけですか？

藤本 と思いますよ。

池田 どういう人が習っていたわけですか？歴史でなく、言語ですか？

藤本 いや、ひょっとしたら、戦後に来られていたのかわかりませんね。ちょっと不確かですけど...

池田 戦後とすると、先生がアラビア語を始められた頃は、全然誰もいなかったのですか？

藤本 そうでしょう。ですから宮崎先生が、「放課後来い」と言われたんじゃないですか。

池田 宮崎先生は、さっき言っておられたように、フランスでやっておられたわけですね？

藤本 宮崎先生は、よく勉強してられましたよ。千一夜物語の本を借りますとね、よくやられるんですわ...

池田 まあ、大体、僕らの時代というと、フランス語やるんでも、モーパッサン読んだり、柔らかいような所を読もうとするわけです。宮崎先生も、千一夜物語、一生懸命読んでおられるんですよ。辞書引っぱられてね。ところが、千一夜物語って読んだところが、あの時分は××の訳ばかりだったのですが、それで非常に面白いと思って先を読んだら、接吻したとかね...（笑）そういう事だけだったりね。（笑）

池田 で、その頃、先生と同じ様に歴史畑の人でアラビア語の方をやろうという人はいらっしまったわけですか？

藤本 今から思えば、前嶋先生が満鉄におられました。

池田 関西には？

藤本 さあ、講座がありませんでしたから、おそらくいなかったんじゃないですか？



それで、戦争に行きまして、昭和二十一年に帰って来て、女学校へ勤めていたのですが、昭和二十三年頃、宮崎先生に挨拶に行ったところ、林先生に代わって京大でアラビア語教えると言われるんです。そんな、無茶な話はないと思ったのですが、まあ、昔、ブローの本を全部訳していたのでね。

加賀谷  
藤本  
加賀谷  
藤本

林先生は、本職はその頃は？

外大に勤めていました。教授か、助教授ですか？

関西におられたわけですか？

布施のあたりかどこかですよ。ところが、林先生が忙しいもので休講が多かったので、宮崎先生が、「お前、教え」と言われ、困りましてね...しかし、怖い先生ですから、とにかく二十三年に林先生と代わりまして非常勤講師で、週一回教えに行くようになりました。

当時、最初に講義に出ていたのが、あの藪内（清）先生、それから藤枝先生とか、そういう先生がいるわけです。大勢ではないですけどね。僕は知らないもので、藪内先生に黒板に文字を書かせたりしまして、後で僕の先輩の佐藤圭四郎先生が助手をしていて、同じく講義に出てまして、聞いてみましたところ「藪内先生だ」と教えられ、で、「藪内先生えらいもうしわけございませんでした」と言ったら、「いやいや、そんな、当ててもらわんと覚えん」と言われましてね。

（笑）で、その次に、今の森本（公誠）先生とか、それから岡崎（正孝）先生、その前には井本（英一）先生とか、そういう人が出て来ていたのです。それから西田竜雄先生もね。

池田  
藤本

それでは、<sup>そうそう</sup>錚々たるメンバーに教えられたわけですね。

あの時には、今のように本がなかったですから、もっぱら地理書とかを読んだりしていたわけです。で、一学期、入門、文法やりまして、二学期からは、それを読ませていたわけです。だから森本先生でも、文法あまり知らなくても読んだわけです。というのは、京都大学はともかく、なんとか読まなければいけませんから。今から思ったら、非常に悪い教育をしたと思うんですけど。

で、終戦後か、前かわかりませんが、ともかく前嶋先生とか、小林元先生、井筒（俊彦）先生に会いに行ったのです。東京で、家を訪ねまして。で、前嶋先生に御本をいただいたりした事を覚えています。

で、そうこうしているうちに、ある事が起こって、日本を出たと。僕がね。

池田  
藤本

日本を出たって、エジプトへですか？

そうです。そのあいだに嶋田襄平先生が四年間、むこう（英国）へ行っておられたわけです。嶋田先生は、たしか僕より四年ほど学年は下なんです。

それで結局、日本のイスラム学史とかからすれば、若手で直接、アラビア語で入ったもので最初は僕らしい。しかし、いわゆる西洋のイ

スラム学の系統を日本に持ちこんだのは、嶋田襄平先生である。そういう事になると思いますが...

池田 「イスラム化(に関する共同プロジェクト)」みたいな集まりができましたね。それより前は、集まりはなかったのですか？

藤本 なかったですね。オリエント学会がいつかできましてね。その中でイスラムだけで集まろうかと嶋田先生や私も言った事はあったのですが、実際には実現せず、結局、「イスラム化」が、イスラムだけで集まった最初じゃないですか。オリエント学会では、天理へ来たりして皆が集まっていますよ。

加賀谷 天理の諸井慶徳先生といった方は御存知ですか？

藤本 よく知っていますよ。

加賀谷 亡くなりましたが、神秘主義のハッラージュとかなんかを研究されました。

藤本 初期のオリエント学会は、諸井慶徳先生なんかの世話になっていたわけですか。

加賀谷 それで、終戦後暫くの間、天理図書館にイスラム関係の図書は一番よく備ってました。

藤本 古い本がね。

加賀谷 だから、東京の人もわざわざ皆で天理にまで来たんですけどね。

藤本 今のような本ではなくて、マクリーズィーの古い(ヴィエの)版とかね。

池田 諸井先生ですか？そういうのを備えたのは？

藤本 諸井先生もそうでしょうね。ヨーロッパで書いた神学関係の古い本ね、あれは諸井先生が集めたのと違いますかね。それから、天理の前の真柱さんというのが、何でもかんでも本を買ってくれたのですよ。

加賀谷 そうらしいですね。

藤本 向こうに行った時、買って来たんじゃないですか。しかし、いわゆるイスラムの歴史とかの系統的な本は置いてないですね。

池田 先生がアラビア語をやられた頃、同じ様な発想でトルコ語とかペルシャ語やろうかというような人は？

藤本 トルコ語は、羽田先生が、だいぶ前から京大におられましたからね。

池田 京大では、トルコ語やペルシャ語の方は、大部やっておられたのですか？

藤本 いやあ、学生がいたかどうか...

加賀谷 ペルシャ語は、足利先生がおられましたね。

藤本 そうです。だから井本君なんかが最初ですか。

加賀谷 井本君と僕とは、テヘランでは同じなんです。テヘラン大学へ留学したのは最初なんです。(昭和三十二年)

藤本 恵谷君は？

加賀谷 少し後だったですね。亡くなったですね。彼はムガールの歴史をやっていました。

池田 先生がエジプトへ行かれた頃というと、結局、最初ですから後輩しかいなかったわけですか？つまり、エジプトへ先生がいらっしやった頃、エジプトで勉強していた日本人というと、後輩とか、教え子ばかりですね。

藤本 いや、内記（良一）先生が先に行っていました。で、僕の後で、森本先生が来たわけですね。その前におられたのが、ちょうど時期を同じくして中岡三益先生ですね。その前には田中四郎先生が最初におられたのじゃないですか。ちょうど僕らがいたのは、エジプトとシリアが離婚した時ですからね。で、勿論、大先輩としては、中の英次郎さんとかいろんな方がおられますけどね。ちょっと後で、板垣雄三先生が来られたのですが、僕らはもう帰っていました。

池田 その頃は、エジプトで本なんか沢山買われましたか。

藤本 ええ、関大にある初期に買ったのが全部そうですね。古い版ですけどね。

池田 本を買うのは簡単でしょうけど、送るとかそういうのは大変でしたでしょう？

藤本 はい。あの時に、あそこのホテルの、何と言ったか...そこの本屋の親父が非常に親切にしてくれまして...

池田 コンティネンタル・ホテルですか？

藤本 そうそう。あの親父は、ヤフード（ユダヤ教徒）でしょう。で今、バイルートに移ったと後で聞きましたが、その親父が郵便局とか、荷造りとか、船で送ったりやってくれました。

池田 あの本屋は今でもありますが、経営者が代わったかどうかは知りません。

藤本 僕が二回目に行った時は、もうおらなあかったですよ。二回目に行った時は、板垣さんとピタッて会ったわけですよ。梅田先生とマレーに行ってその帰りに寄った時ですが。

梅田 そうです。「もうあかん、ここから帰れ」って言われましてね。

藤本 この人は、シンガポールから帰って来ましてね。むこうへ行きたかったでしょうが（笑）、あの時は、ちょっとノイローゼ気味やからね。早よう日本へ帰るのがよいと帰らせてしまったんですよ。で、あの時に、パンションにおったら、「日本人が訪ねて来てる」と言われて、で、何やと思うたら、こうピタッと...これがかの有名な板垣さんですかという事で...（笑）、こっちがびっくりしたというわけです。「なんで御存知ですか」と言ったら、「大きな奴がまた来た。バスに乗っているという通報が新聞社に入った」と、つまり僕の事がね。で、「それを聞いて来たんだ」と言うんです。

梅田 先生の事。むこうの雑誌だったか、新聞記事でありましたね。

藤本 あれはねえ、インチキなんですよ。アズハルでの事ですが、僕が行ったら新聞記者がパンションに来てね、あちこちに連れて行かれましてね。僕の方がよく知っておって、僕が説明してやったんですわ。（笑）むこうの新聞記者にね。「これがバーブズワイラ」とか言っ

てね。で、アズハルに行った時は、もう地べたに寝てる人をです。皆集めてね。シャイフなんかっていうひげの生えた偉い人が出てきて、そのおっさんが椅子に座り、僕は地べたに座ったんですよ。で、僕がいろいろ聞いているポーズを撮ってるわけですよ。「イスラムの心とはなんぞや」って事をね。

そのぐるりに集まってるのが、皆、寄せ集め、エキストラが集まってる。

池田 その時分は、エジプトの滞在許可というのは簡単でしたか？最初に行かれた頃ですが。

藤本 そのう、カイロ大学の証明書をもって。

池田 はあ、大学に籍を置くという形で...

藤本 あの時は内記先生がいろいろ世話をしてくれたってわけです。入学の証明書もらってくれたりね。それでマドラサ・サイディーヤですか、あそこを世話してくれまして、そこへ行ったんですよ。

まあ、アラビア語の初級というのも...こっちはもう行った時には、一応読めるわけですからね。初級っていうのも何やなという事で中級に入ったんです。それが悪かったですね。

アフリカの諸君とか一緒にこうやっておったわけですけどね、ところが僕らの世代というのは英語のヒヤリングが出来ないでしょう。さっぱり発音がわからないわけです、最初。むこうは、アラブ式の英語で説明するわけですよ。で、英語で「プロフェッサー・アンダースタンド」ってすぐ言うんですよ。僕はアラビア語は、読んだら分かるわけですよ。で、そこの横におったアフリカの青年に、「君、あの英語わかるか」って言ったら、「よくわかります」と言うんです。「わし、わからんで」と言ったら、「私らは植民地で英語で育っているから、よくわかります」というような話をしましてね。

まあ、僕は読まされたら、読むわけですよ。それでいやになってきましてね...あれだったらむしろ、初級に入って幼稚園の子供と一緒にやってたらよかったですね...それで、いやになってやめてしまって、ちょうど中岡さんも奥さんもおったから、大いに老骨を楽しんでおったという事ですな(笑)。しかし、今から思ったら非常に残念でね。

池田 当時、大学の方へはいらっしゃったんですか？

藤本 行きました。講義の名前は忘れましたがね、歴史の講義に入ったんです。そしたら学生がガヤガヤ言ってね。

で、先生が鞭を持ってバーンと怒りよるんですよ(笑)。

池田 そうですね。

藤本 で、何をやったかと言うとね、教科書はメッツのルネッサンス・オブ・イスラムのアラビア語訳なんです。で、隣に座っているのに、「お前分かるんか」と言ったら、「分からん」と言いまして、アラビア人が分からんのやから、僕に分かるはずないでしょう。本は、それやから読んだら分かって...これはいかんと、これもやめてしまっ

つまり、まあいわば、非常に希望に燃えて行ったんだけどね、結局、むこうの学校、大学に悲観をしてですな、多いに街で、民衆の...なんなりを吸収しようという事で...(笑)

今、思ってみると、やっぱり最初に行った時に、もうちょっと若くてね、組織的にやって、頑張って我慢すらや...もっと僕は偉くなっとったかわからんですな。まあ、読めるってのはね。

やっぱり、これから若い人が行く場合も頑張らないかんですな。

加賀谷  
藤本  
池田

だいぶ後で、東南アジアのイスラムの調査をされましたね。

そうですね。昭和四十年です。

インドネシアじゃなくて、マレーシアですね。先生が行かれることになったのは？

藤本

それは、当時、京大の人文研の所長が岩村忍先生がやっておられたんで、米とかそんなのを調べるのではいかんと、やっぱりイスラムそのものの専門家が行って事で、「お前行け」と言うのです。マレー語も知らんけど、まあ、なんとかやるやろう...で行ってみて、そうするとね、アラビア語が必要なんですわ。

イスラム圏ってのは、アラビア語がどうしても必要なんですわ。マレー語だけじゃ駄目ですね。まだ宗教局なんかがありましてね。インドネシアは知りませんがね、マレーではカーディーとかムフティーというのは偉いですわ。これは、年寄りにはメッカですけど、新しい若い奴はアズハルですわ。で、メッカ派とアズハル派でいろんな事がありましたけどね。で、ムフティーとかする奴は皆、メッカ派でしてね。

宗教局でやる事はシャーフィイーのキターブル・ウンムなんかで、これがいっぱい置いてあるんですよ。で、「行け」と言われたから、まあ行ってやろうかってな調子で行ったんですけど、ところがびっくりしたのは、そういうアラビア語で書いたマレー語とかが一杯あるという事です。

文化人類学的調査っていうのは、僕はあまりよく知らなかったから、悪口言うとね、「私が行ったら、こうやった」とですな、「僕が行った所、違うやないか」って行っても、証拠がないでしょう？ねえ、加賀谷先生が行かれたところはこういうものだった。私が二、三年後行ったら違うとかね...

それから、もう一つねマレーのカンポンでたどたどしいマレー語で話したぐらいでね、イスラムのための調査というのは出来ませんよ。イスラム教徒の中に入ってね、イスラムやってる者が「お前なんでイスラム教徒になった？」とかね、そんな馬鹿な事は聞けないでしょう。だからもっぱら文書を集めてね。だから、僕が報告作っているのは、文書ばかりですよ。聞き取りの学問というのは、ちょっとよくわからなかったですからね。

加賀谷  
藤本

ムフティーとか、カーディーとかの制度は？

マレーはもう立派なものですよ。だから僕はファトワの発表も、持って来たファトワで書いたんですよ。

加賀谷      ファトワは、マレーシアではメッカの宗教指導者とかに送って...  
藤本      いやいや。  
加賀谷      ファトワをあおぐんじゃなくて、自分の所で...  
藤本      自分の所でやる。宗教局がね、ムフティーがやるんですよ。だから、  
今度行く機会があれば、そういう物を集めて来たら面白いと思うんで  
すよ。それでもやっぱりジャウィーですから、アラビア語を読める人  
でないとやりにくい。

池田      そういう物は簡単に手に入るのですか？  
藤本      手に入ったこともあるしね。それからブラブラ出かけて、ザカート  
の本を見せて言ってね。まあ嫌がりますわな、ほんまは。そうやけど、  
僕はマレー語はあまりよう分からんもんやからね、まあ言ったら、  
「キャン・オア・キャンノット」って言うわけです。「ボレカ・タボ  
レカ」って言ってね。だからむこうが「ボレボレ」って言うから、  
「おう」ってこう持って来るわけです。(笑)僕は、「くれるか」っ  
て意味で言ってるわけです。むこうがそういう意味でとっているかど  
うか知りません...(笑)

加賀谷      兵隊の時は、やっぱり中国ですか？  
藤本      そうです。  
池田      その時には、もう全然、現地中国で、イスラム関係のどうこうって  
事は全然ないですね？

藤本      ありませんし、それにそんな事考えられもせんかったですよ。  
池田      先生、今度はコーランの翻訳の話をお願いします。  
藤本      僕がマレーに行って帰って来た時に、すぐに中央公論から電話があ  
りましてね、「あのう、先生に(コーランの)翻訳を頼む」と言うん  
です。僕は、「そんな話は聞いとらん。誰がそんな話し、決めたん  
や」と言いますと、「世界の名著」の編集委員に、貝塚(茂樹)先生、  
日比野(丈夫)先生らが入ってられ、そう言われたんだと、もう広告  
も出してそう決まったんだと言うんです。まあ、コーランの翻訳って  
いうのは、僕らの常識で考えたら出来るはずないでしょう...それで、  
まず最初に嶋田襄平先生に協力をお願いしたんです。ところが、再三、  
お願いしたんだけど、「忙しくて出来ない」と言うんです。それで伴  
(康哉)先生に言ったら、「やりましょう」と言うんです。で、池田  
先生に後で加わってもらったわけです。

池田      僕はスタートした時にはバグダッドに行っていなかったんです。最  
初は藤本先生と伴先生がやってられたわけです。  
ところで、先生、コーランの解説の中に明治からのマホメット伝と  
かコーランの日記の歴史とかの事を書いてられますね？

藤本      徹底的には調べてませんけどね。まだまだもっとやらないかんので  
すが、まあ、分かった範囲で書いておきました。

加賀谷      本屋に行くと、井筒先生のとか、藤本先生のと、あと日本イスラム  
協会のとか、三つくらいの訳が並んでますね。

藤本 あのとときはまだ、イスラム協会の三田了一さんの訳は出ていなかったのですが...しかし、僕は井筒先生をある意味では尊敬してますし、それから三田さんの訳ができるという事は非常に待ちどおしいという事を書いたとききました。我々の方は、なるべく原文に忠実にね、訳しておきました。まあ、僕もいずれもう一遍やり直したいと思っているんですが。

加賀谷 あれはまだ版は...改訂は？

藤本 していません。

加賀谷 中央公論の編集の方から、文章のくせとか、言葉とかは、こういう風にしてくれとかは？

藤本 そういう事はありません。

池田 最近、先生、この東西研で遠大な計画を次々に実施なさってられるんですけど、それについて何かありませんか？

藤本 まあ、今、一連の(訳注)シリーズで二つ(シナ・インド物語、インドの不思議)出とるんですけど、今度はマスーディーとかああいう物を訳してみたいと思っているわけです。そうしますと、まあ東西研、つまり東と西の関係をやるとすると、海上交通の史料が三つ出来上がるわけです。

池田 この東西研はどういう事をやっているわけですか？

藤本 正式には、関西大学東西学術研究所といいまして、東西文化の比較とか交流とかを研究課題としているわけです。研究班が四つありまして、日中関係では「歴史研究班」「言語研究班」そして僕がやっている「文化交渉史研究班」があります。

池田 いつ頃、研究所ができたのですか？

藤本 全身になるものができたのは昭和二十六年ですが、大学の組織のひとつとしては昭和四十年からです。

池田 先生がこの研究所の所長をやられたのは、いつ頃からですか？

藤本 四年前です。任期は二年ですから、今は三期目です。

池田 訳注シリーズとしてアラビア語文献の翻訳を始められた動機は？

藤本 それは、イスラム学の分野で、こう難しい、学会の定説をくつがえすような論文が出てきても、読むのはもう一部の人で、他の人には分からないでしょう、アラビア語が。いわゆる中国史だったら、史記・漢書とか引用しても読んで分かりますけどね。たとえば、タバリー何ページとか引用しても、なかなかね読んで分かるとはいかないですからね。それで僕は、たとえばイブン・ハルドゥーンがあれば、イブン・ハルドゥーンとはこんな物やと、これから勉強する人が読んで先人の訳とか説を直すとかがする、そういう、いわゆる「翻訳時代」というものがなけりゃいかんと思ひましてね。で、まあ、ぼちぼちやっています、それで福原(信義)先生に助けてもらって二冊目(インドの不思議)を出したというような事なんですわ。

池田 で、その次がマスーディーの「黄金の牧場」と。

藤本 やろうかと思っているんですけどね。なかなか難しゅうて...

で、タバリーなんかも訳したりもいいんですけど、真すーdいーというのは、トルコとか中国とか、いろいろな話が入っているから、広い意味では面白いだろうと思っているんです。

それから、やっぱり私が思うのは、若い諸君が集まって、タバリーならタバリー、あるいはアシールでもいいけど通史を最初から読んで行くという事が必要じゃないんですか。この頃は、タバリー引用する学者は少なくなったけど、やっぱりああいう物をずっと最初からね、読んでいかんと...そうせんといかんと思うんですけどね。これはまあ宮崎先生の考え方にもあるんですけど、宮崎先生というのは、たとえば資治通鑑長編を最初から全部読んでね、それから論文書けという先生ですね。今、そんな事したら若い者。飯食えんですけどね(笑)。だから、その為には何か研究所を作ったりしてね、若い研究者をそこで吸収できるね、論文書かんでも。この頃、なんか点数なけりゃ大学になんか入れてくれないでしょう...そういう所が欲しいんですわ。大阪なら、大阪にでもね。いわゆる働ける所をね。

加賀谷　　そういった物をずっと読まれて、その成果を出版されるというような出版関係は？

藤本　　出版関係は、うちの研究所でやれば、うちの大学で出せますから。だから金儲けするつもりでなけりゃ、うちでやれますよ。

池田　　案外、本は無茶苦茶あるけど、翻訳とかいうのを飛び越えてしまっているのが多いですね。

藤本　　で、僕は、そういうのをしなくちゃいけないと思うんです。僕らみたいな物が翻訳時代の翻訳を残していくのがいいんじゃないかと。というのは、後の者が、そのテキストで直してゆけるでしょう、先輩のをね。今の日本の論文の論争となると、そういうのを直すのは、直せないでしょう。よっぽど優秀な人でなけりゃあ。まあ、年寄りの楽しみをこれからしようという事ですな(笑)。

池田　　今、段々と、先生の教え子とか、またその弟子とか、アラブの事をやる人が少しづつでも増えてきましたね。

藤本　　まあ、関西でもね。人数は少ないんですけど。

池田　　そういう人に、なにか助言を与える事はありませんか？

藤本　　やっぱり、僕の失敗から言えば、アラビア語読めないかんでやったりゃあ...なかなか歴史理論はできんしね、これはむつかしいですよ。しかし、本当言えば、あの嶋田先生はそうやられたんだけど、ヨーロッパ人の書いた物をね、基本書を全部読んで...と、その間にアラビア語出来んようになるからね。難しいんでね。それともう一つ、やっぱりヨーロッパ人を見直すという事も必要じゃないんですかな。その為には、しっかりとアラビア語読めん事には...て事になりますわな。これは大変なんですよ。

池田　　今日は、どうもありがとうございました。



〔藤本勝次先生の略歴〕

大正十年 大阪市に生まる

昭和十八年 京都帝国大学文学部東洋史学科卒業

現在、関西大学教授、関西大学東西学術研究所長

〔昭和三十五年カイロ留学、昭和四十年マラヤのイスラム社会調査、中東諸国歴訪〕

現住所 兵庫県川西市緑台三ノ一五十五

## 編集後記

日本アラブ関係国際共同研究事業のひとつとして、日本アラブ関係のさまざまな側面で直接苦勞を重ねられた先輩の思い出を記録にとどめる仕事にとりかかって一年ほどたった。あこの記録シリーズの第一冊として、前嶋信次先生、大原與一郎先生、藤本勝次先生の思い出をようやく刊行する運びとなった。

今まで書かれたこともない、またはなされたこともない先生方の談話は、われわれ後進のものにとってこの上なく貴重なものであり、また意外な時に意外なお話が伺える楽しみもある。

このシリーズでは、研究上の思い出だけでなく、外交関係・経済関係のひとこまひとこま、あるいは宗教関係・文化関係にまつわる思い出を含めて収録し、幅広い日本アラブ関係の当事者が語る資料集として豊かなものにして行きたいとねがっている。

こういう方からこういうお話を伺えというご意見を寄せていただければ幸である。なお第二冊には田村秀治先生の思い出ほかを予定している。

このシリーズの刊行は、トヨタ財団からの研究助成金に拠っている。同財団にたいし謝意を表する次第である。

昭和五十五年九月

日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局